体育科におけるジレンマの発現に関する一考察

教科・領域教育専攻
生活・健康系コース（保健体育）　　指導教員　湯口雅史
釜圭吾

1．研究動機

OECD の Education2030 プロジェクトの中で「エージェンシー」という新しい概念が提唱された。DeSeCo プロジェクトで定義されたキー・コンピテンシーに立脚して，3 つのコンピテンシーのカテゴリーを「変革を起こすコンピテンシー」として特定した。「新しい価値を創造する力」，「責任ある行動をとる力」，「対立やジレンマを対処する力」である。ここで注目したのが「対立やジレンマを対処する力」である。

体育授業の中で「対立」や「ジレンマ」がどのように発現し，また，それをどのように対処してコンピテンシーやエージェンシーの育成につながっているのだろうかと疑問を持った。

そこで，本研究では小学校の体育授業に参与観察者として入り込み体育授業の様子を観察し，「ジレンマ」が発現する場面について観察記録を取り，授業中に起こったエピソードに着目して考察を進める。また，小学校の体育主任等の先生方に，体育授業をしている中で「対立」や「ジレンマ」が子どもの中で発現しているのかどうかを，インタビューを通じて得られたデータを元に SCAT 分析を用いて考察を行う。それらを元に体育授業におけるジレンマの発現についての解釈を目的とする。

2．研究方法

（1）フィールドワーク

①研究対象

徳島県内の H 小学校（全校児童 27 名）

徳島県内の J 小学校（全校児童 81 人）

②データ収集法

- 参与観察

③分析

- エピソード記述による分析を行う。

（2）インタビュー

①研究対象

徳島市内の小学校教員 7 名

②データの収集

- 半構造的インタビュー

③分析

- SCAT のフォーマットを作成し分析を行う。

3．考察

エピソード記述からジレンマの発現について考えられることとしては，以下のことがある。

- 自分のための行動をとるか集団のためになる行動をとるかを選択する状況。
- 周りから見られている中，場を選択しなければならない状況。
- 誰かにパスを出さなければならない状況。
- 友達とのかかわりで，するかしないかという選択を迫られた状況。

SCAT分析からは以下のことが考えられる。

- 技能が高い子が体育の評価が高いという体育観が形成している子どもに社会的構成主義に基づく体育授業を行ったとき単元初めにジレンマが発現する。
- 集団種目において，自分がしたいことをするか，集団に協力するかというところでジレンマが発現する。
- 技能が高くこだわりが強い子にジレンマが発現しやすい。
- 周りに流されやすい子はジレンマが発現しにくい。
- 低学年では，学習観の形成がされていないことや，自分の欲求に素直であるため，ジレンマの発現が見取りにくい。
- 高学年になると，体育やスポーツクラブの経験の蓄積から体育観やスポーツ観が形成されることでジレンマが発現しやすい。
- ジレンマが発現し，技能の向上思考からめあてにあった思考へと体育観が変容する。
- ジレンマの発現から，自分のための行動から集団のための行動に変容することがある。
- 対立は，個人種目よりも集団種目に多く発現する。
- 対立は，子どもの価値観のぶつかり合いにより発現する。
- 単元終盤にかけて，対立は減少していく。
- 対立が発現したあと，ジレンマが発現する時がある。

4．結論

エピソード記述とSCAT分析から，体育授業ではジレンマや対立が発現することが分かった。

子どもが体育の授業の中で状況とかかわり，いくつかの選択肢の中から選択しようとする場面があることが，ジレンマが発現する要因であった。教師が一方的に指示することで，子どもが選択をするという状況が少なくなり，ジレンマが発現しにくくなっていた。ジレンマの発現においては，教師が，子どもの活動をサポートするような立場に立つことが大切である。また，社会的構成主義の授業を行うことで意図的にジレンマを発現させられることが分かった。

個人活動の運動領域と集団活動の運動領域では，ジレンマの発現の見取りやすさに違いはあるもののジレンマは発現することが分かった。

ジレンマが発現し，それを克服しようと学びを進めた結果，子どもの行動や思考の変容もみられた。また，ジレンマが発現しやすい子の特徴として，体育への学習意欲が高かったり，技能向上の欲求が高かったりする子に発現しやすく，周りに流されやすい子はジレンマの発現が見取りにくく発現しにくいことが分かった。そして，ジレンマの発現には，子どもの発達段階が関係しており，低学年では，ジレンマが発現しにくく，高学年ではジレンマが発現しやすいことが分かった。

今回明らかになったのは，社会的構成主義に基づいた体育授業における「ジレンマ」や「対立」の発現についてである。子どものジレンマの発現により，子どもの行動や思考が変容していた。それは，コンピテンシーやエージェンシーの育成につながると考えられる。今後は，筆者自身が授業実践するにあたって，社会的構成主義に基づく体育授業の構築を目指し，その中で，子どもが状況に応じた選択を自ら行い，ジレンマを克服してコンピテンシーやエージェンシーを育成していけるような授業づくりをしていきたい。